



TITLE:

恩師汐見先生

AUTHOR(S):

柏井, 象雄

CITATION:

柏井, 象雄. 恩師汐見先生. 經濟論叢 1963, 91(3): 224-225

ISSUE DATE:

1963-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/132932>

RIGHT:

經濟論叢

第九十一卷 第三號

故 汐見三郎博士遺影

オーベル・シュレージェン

製鉄業の再編過程……………大 野 英 二 1

プレハーノフの

ロシア資本主義論(三)……………田 中 真 晴 26

セルデン特許と

Electric Vehicle Co. ……………岡 田 賢 一 49

故 汐見三郎博士略歴・主要著書論文目録……………61

追憶文(中谷 実・柏井象雄・田杉 競)

昭和三十八年三月

京都大學經濟學會

れたのである。「日本財政の特殊問題」がそれである。先生が日本の財政学に残された数多くの功績の一つであると思っている。

昭和に入ってから、われわれは、日本の財政史で特筆されるべき二つの大きな税制改革をもった。一つは昭和十五年のそれであり、いま一つは、シャープ勧告にもとづいて行われた昭和二十五年の税制改革である。先生は前者では税制審議会の委員として、後者ではシャープ使節団の日本側顧問として、重要な役割を果たしたのである。これも、先生が、日本の財政なり財政学に残された大きな功績として、汐見先生を語る場合、忘れることのできないものである。

恩師汐見先生

柏井象雄

昭和のはじめ頃までの日本の財政界はすでに一つの型のできあがっていた独乙財政集の方式や内容を、いわば、そのままの形でとり入れていくというようないきかたに、全力を傾注してきたといってもよい。そのようなとき、汐見先生は、わが国の具体的な事実を基礎にして、日本の財政学の一つの進路を示さ

私が経済学部の大学院に入学を許され、財政学を専攻するようになったのは昭和七年であるが、先生が、それまで研究室で身につけられた理論をもって、税制改革に関する実務面での活躍をはじめられたのは、その後、しばらくしてからであった。爾来、三十年ほどにもわたる間、いつも、先生が自らの体験によって創りあげられた財政や税制に関する基本的な考えかたを親しく教えて頂いた。現代日本財政史や税制史ともいうべきものを、それを動かしてこられた先生からジカに教えて頂いたわけである。

そうした学問上の先生の教訓は、いまでも、私の財政学なり租税論に関する一つの基本的な考えかたや態度になっているが、

とくに、学問的な面以外で、先生との雑談の中から得られたものも、私の生活や研究の上での大きな力になっている。先生と食事をしたり歩いているとき、温顔で、トットツとした口調で、日常の生活でも、研究についても、行きつまってしまつて、八方ふさがりというような状態になつたように感ずることがあるが、そのような場面にぶち当たったときにこそ問題が解決しようとしてゐるのである。くぢけず、もう一ふんばりしなければならぬ。というような意味のことをよくいわれた。そのような場面にあたる毎に、いつも先生のお言葉を思い出しては、自らに鞭打ってきたつもりである。これからも、この気持ちをもちつづけて進んでいきたいと考えてゐる。そして、それが一番先生の教えに酬い得る所以であるとも思つてゐる。